

よりよい教育環境を創るために

学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2017年度

鹿児島大学水産学部FD委員会

1. はじめに

鹿児島大学水産学部、および、大学院水産学研究科では、平成 27 年度より新カリキュラムが始まりました。学部では、3 領域による入試が始まるとともに、4 つのプログラムが設定されました。大学院（修士課程）では、グローバル化の一環として熱帯水産学国際連携プログラムが創設され、フィリピン大学ビサヤス校、タイ国カセサート大学、インドネシア国サムラトランギ大学、マレーシア国トレンガヌ大学、ベトナム国ニャチャン大学の水産学系研究科と連携して、現在 6 ヶ国 6 研究科で運営されています。

このような新しい取り組みが順次行われる中、平成 29 年度 FD 委員会では、新しい入試制度のもとで入学した学生に対する指導の充実、学生に主体的な学習を促すための方法、などを課題として取り組んできました。FD ワークショップでは、入試改革をうけて入試後の指導をいかに行うべきか議論しました。また、全学のワークショップでは、教職員と学生が一緒になり、どのようにすれば、学生の主体的な学習を促すことが出来るのか意見交換しました。

この一年間の FD 委員会の活動を振り返り、以下のようにまとめました。

2. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会では受講生に対し、各学期末に授業アンケート（表 2.1）を行っています。受講生の抱く満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、平成 28 年度後期および平成 29 年度前期の授業アンケートについてまとめます。なお、ムードルを用いた授業アンケートの実施は、平成 28 年度後期からの実施となり、質問内容も刷新されています。特に、受講生の満足度を「はい」か「いいえ」で答えたのち、満足できた点あるいは満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、新しい視点からの意見集約が行われました。集計作業で得られた新たな課題も見えてきましたので、下記 1) ～4) で解説いたします。個々の授業科目に対する学生からの感想や要望は、授業担当者のムードルで見られるようになっています。平成 30 年 4 月以降は、Manaba への移行に伴い、Moodle にアクセスできなくなるなどのことですので、個々の教員におかれましては、3 月中にアンケートデータの閲覧、もしくはダウンロードをしていただき、授業

表 2.1 Moodleを用いた水産学部授業アンケートの質問項目

1	この授業を選んだ動機は何ですか？（複数回答可） 授業内容に興味・関心を持ったから／専攻分野との関連性を考えて／履修しやすい曜日や時間帯だったから／必修科目だから／単位修得のため
1	この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習（予習、復習、宿題など）をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。
3.	授業はシラバスどおりに進められましたか？（はい・いいえ）
4.	シラバスに示された学習目標を達成できましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
5.	授業は分かりやすかったですか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
6.	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
7.	第1回から最終回までの授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
8.	他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？（はい・いいえ） ⇒はいを選択した学生は、重複・類似していた内容、および、重複・類似内容に対する感想・意見を以下に記入してください。
9.	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？（はい・いいえ） ⇒はい又はいいえを選択した理由を以下に記入してください。
10.	担当教員が次年度の授業改善に役立ちますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。

改善にお役立ていただけますようお願いいたします。

1) ムードルによる授業アンケートの回答率について

	対象科目数	回答者数:0人	回答者数:1-4人	回答者数:5人以上
H28年度 後期	64	22 (34%)	11 (17%)	31 (48%)
H29年度 前期	100	58 (58%)	14 (14%)	28 (28%)
合計	164	80 (49%)	25 (15%)	29 (36%)

【要点と課題】

- ・ 5人以上から解答があった科目は、全体の約4割であった。
- ・ H29年度後期以降の回答率(科目数、人数とも)が改善されるように、アンケート方法や実施時期について検討が必要である。
- ・ H30年度にmanabaへ移行した後に、授業アンケートの利用が停滞しないように、教員へのmanabaでのアンケート使用法周知などの対策が必要と考えられる。

2) 各アンケート項目の集計結果について

	H28年度後期	H29年度前期
Q1. 自宅学習時間(平均)は?	0.98±0.24	0.92±0.1

各項目に対し、「はい」と答えた割合(%)

	H28年度後期	H29年度前期
Q2. シラバスどおりの授業だった?	96.8±0.2	96.8±1.0
Q3. 学習目標を達成できた?	87.5±2.5	97.9±0.8
Q4. 授業はわかりやすかった?	85.8±3.6	93.6±2.0
Q5. 質問しやすかった?	91.5±1.8	92.4±2.5
Q6. 授業構成や進め方は適切だった?	85.8±3.5	97.3±0.8
Q7. 全体的に満足?	92.0±2.1	95.8±1.4

【要点と課題】

- ・ いずれの質問項目に対しても「はい」と答えた割合の平均は85%を超えており、ほとんどの受講生が学部で開講している科目に満足していることが判った。
- ・ 個別の科目を見てみると、Q4、Q6、Q7について、「はい」と回答した学生の割合が60%を下回る科目が、1～5科目程度存在した。これらの科目については、他の科目と比べ大きな差があり、授業内容の改善を検討される必要があると考えられる。

【各項目に対する学生からのコメント総括】

Q1. この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習(予習、復習、宿題など)をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。

- ・ 本項目では、0～5時間(最小～最大)の範囲で入力があった。
- ・ 多くの学生は、一科目に対して週平均0.5～2時間程度の自宅学習している様子が窺えた。

Q2. 授業はシラバスどおりに進められましたか？

- ・ コメント欄の設定なし。

Q3. シラバスに示された学習目標を達成できましたか？

- ・ コメント記入欄では「いいえ」を選択した理由を問うているが、回答はほぼ無い(「はい」を選択する学生が多いため)。学生からの回答を増やすため、アンケート設定内容を変更する必要があると考えられる。

Q4. 授業は分かりやすかったですか？

- ・ レジュメの配布、スライドの内容、標本の展示、動画の利用(教員自身が撮影したビデオなのでポイントがよくわかった)、授業回毎に一つのテーマで話をする、といった種々の工夫に対して、高評価コメントが集まった。

Q5. 授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？

- ・ 授業中での質疑の時間、学生への投げかけ質問、ミニツツペーパー、コメントシート、出席カード、ムードルの質問欄への返答、に対して、高評価コメントが集まった。
- ・ その一方で、教員側から上記のような何らかのアクションを起こさないと、「配慮がない」と言われてしまう傾向が見られた。

Q6. 第1回から最終回までの授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？

- ・ ペースが速すぎる、難しすぎる、専門的すぎる、資料が見にくい、ことが低評価に繋がるようである。
- ・ シラバスのとおりに行進することに対して、高評価が集まった。
- ・ (実験科目において) 時間が余りすぎるといったコメントがあった。
- ・ (実習科目において) 「予定が変わるのは仕方ないが、途中でシラバスに新たな予定が入ったことが疑問でした」という意見が散見された。シラバス(実験、実習内容)を変更する際には、学生に対する丁寧な説明が必要と考えられた。

Q7. 授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？

- ・ 高評価、低評価ともに、個々の授業内容に対する感想が多く記述されており、全体的な傾向は感じ取れなかった。

**3) H29 年度前期からの新しいアンケート項目:「他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？」
という質問に対して**

「はい」と答えた割合(%)

	H28 年度後期	H29 年度前期
Q8.他の科目との重複や類似性は？	-	42.4±3.7

【要点と課題】

- ・ 重複した内容が見られることに対して、学生からのコメントは、おおむね肯定的だった。関連する科目とのつながりを意識できているようである。

(コメント例)

- ・ 「〇〇学との関連性などをふまえ、より深い理解を得ることができ、満足のいく授業であった」
- ・ 「〇〇学で学習した内容があったが、復習になるのでよかったと思う」
- ・ 「〇〇の授業で同じことを何回も聞くので、相当重要な事項なのだと思った」
- ・ 「重複していたが特に気にならなかった」
- ・ 「異なる講義で紹介されたことにより、重要性が分かった」
- ・ 学生のコメントから、「イカナゴ、捕鯨問題、混獲、漁法、感覚器、初期減耗」について、本学部の複数の授業で多く扱われているような印象を受けた。否定的な意味ではなく、キーワードとして、学生にインプットされているように感じられた。
- ・ 科目間での授業内容重複に対して、否定的な意見も見られた。否定的な意見が多く出た場合どう対応するかを考える必要がある。学生からの否定的コメントを見ると、分野間というよりはむしろ、分野内の教員同士で学生からの情報共有が必要と考えられる。そのうえで各科目の特徴を学生が明確に理解できる工夫や、科目間での授業内容の調整が必要になるかもしれない。

(コメント例)

- ・ 「〇〇で似たような話を聞いた、と感じる面が多かった」
- ・ 「〇〇のところはかぶっていた」

4) その他

- ・ 「担当教員が次年度の授業改善に役立てますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。」へのアンケート回答に対しては、個々の教員で確認し、さらなる授業改善に活かしていただきたい。

3. 授業公開・参観と授業改善

授業公開については昨年度と同様に、授業公開科目を募った後に授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。平成 29 年度は、下記に示す合計 19 科目で授業公開が行われました。

前期（計 11 科目）

生物海洋学、プランクトン学、基礎水産資源学、電子工学基礎、漁具漁法学、食品衛生学
資源生産管理学、海洋生態学、沿岸地域経営論、水産企業論、水産科学実験Ⅱ

後期（計 8 科目）

水産物需給論、フードビジネス論、水産経済学、水産マーケティング論、水産総合分析演習、
生体防御学、実験計測機器基礎、水産総合演習Ⅱ

公開科目数は昨年度に比べてやや減少しましたが、多岐にわたる分野の教員が実施しました。その一方で、公開授業で授業参観が行われたのは 1 科目のみでした。前年度から、授業参観の低迷が指摘されていましたが、本年度も引き続き同じ状況でした。近年、教員数の削減による学務煩雑化のなかで、授業参観数の増加とそれによる教育向上については、今後の課題として残されました。

4. FD 講習会「学内ネットワーク利用の注意点」、「OO」鳥居記入

平成 29 年度は、FD 講習会を二度、開催しました。

1) 学内ネットワーク利用の注意点

平成 29 年 7 月 19 日に教職員を対象とした FD 講演会を開催し、「学内ネットワーク利用の注意点」と題して、水産学部情報ネットワーク専門委員であります水産資源利用科学分野の横山佐一郎助教にお話をいただきました。本講習会の目的は、ネットワーク利用者のセキュリティ意識の向上であり、1. ネットワークに潜む脅威、2. ネットワーク利用者になること、3. 平成 28 年度ウイルス通知訓練の結果報告、4. まとめ、の 4 つについて順を追って解説されました。

講演ではまず第 3 期中期目標である「全学的な情報セキュリティ機能を強化する（法令遵守に関する目標）」、および中期計画の「時代に即した情報セキュリティ機能を強化するために、サーバの脆弱性診断の実施、情報セキュリティ教育、IT 監査および情報セキュリティインシデント対応業務などを充実する」が示され、鹿児島大学の教職員としてのネットワーク利用に関する責務が改めて確認されました。次にネットワークに潜む脅威の現状として、マルウェアの定義や種類、政府機関への攻撃件数とランサムウェアの件数が説明されました。さらにその件数が年々増加の一途にあることや、鹿児島大学および本水産学部において発生した実際のインシデント事例(4 件)についての

紹介がありました。そこでこれら脅威に対してどのように対処すべきかについて、ウイルス対策ソフトや更新プログラムの定期的な適用、また怪しいメールに対する対処法などが紹介され、また怪しいメールや添付ファイルを開いてしまった場合には速やかに対処することが大切であるとの指導がありました。最後に平成 29 年 3 月に行われた大学全職員に対する迷惑メール対応、通報訓練の集計結果が報告されました。これは疑似攻撃メールを職員に送信しその対応について集計した訓練ですが、鹿児島大学全体では 10%が疑似ウイルスに感染し、そのうち約 70%がサイバーセキュリティ戦略室への連絡なしと、大学全体で情報セキュリティに対する意識を早急に高めていく必要があることがわかりました。特に水産学部では疑似ウイルスに対する感染率が高かったため、今回の FD 講習会を通じた教職員の意識改善が期待されます。

攻撃メールの手法は年々巧妙になっており、「研究費補助金採択結果」「緊急災害情報」など大学職員であればつい開いてしまいそうな題名の迷惑メールも報告されています。ウイルスへの感染は学内だけでなく、国内外の他施設の共同研究者などにも大きく影響を与えることになり、研究や教育に大きなダメージを与える可能性があります。また水産学部には多くの学生が在籍し、他学部に比べ多くの留学生がいます。学生を加害者にしないためにも、今後は学生への情報セキュリティ教育がさらに重要になると思われます。以上の理由より、教職員のセキュリティ意識の向上につながる FD 講習会は今後も定期的に行う必要があると考えられます。

なお、FD 講習会には全員で 42 名の参加者があり、その内訳は教員 34 名、事務職員 5 名、技術部職員 3 名で、専任教員の出席率は 70%でした。

2) manaba の使用方法について

平成 30 年 3 月 19 日に教職員を対象とした FD 講演会を開催し、「manaba の使用法について」と題して、高等教育開発センターの森氏より講演を頂きました。本講習会の目的は、来年度より、学生アンケート等が Moodle から manaba へシステムが移行されるにともない、その基本的な使用方法について学ぶことです。講習会では、manaba の基本的なシステムに加えて、respon の出席管理、クリッカー、アンケートの 3 機能について、PC を操作しながら学びました。当初は操作に戸惑う教職員もみられましたが、森氏からの丁寧な解説もあり、それぞれ操作をすすめることができるようになりました。細やかな部分は全学の manaba 利用説明会で学ぶ必要がありますが、重要な部分の操作方法については理解が高まったようでした。

なお、FD 講習会には全員で 35 名の参加者があり、その内訳は教員 34 名、事務職員 1 名でした。



5. FD ワークショップ「入試改革と入試後の指導」

平成 29 年 12 月 27 日、教職員を対象にした FD ワークショップを開催しました。「入試改革と入試後の指導」のテーマのもと、参加した教職員は 3 つのグループに分かれてディスカッションをしました。はじめに、入試改革前と入試改革後の教育の変化を念頭に置きながら、学生の勉学状況、講義中の様子などについて参加者より報告がありました。その後、具体的な議論に入りました。まず、A 班では「入試方法別倍率変動と入学後の学力及び入学者の意欲」をテーマに、前期後期の定員比率・倍率変動が入学者の質に与える影響、入試の大括り化と late specialization への対応などについて、B 班では「入試方法別入学者の学力と 1 年次の指導体制」をテーマに、教養基礎科目のカリキュラムと指導体制、低学年次の学部専門科目のカリキュラムなどについて、C 班では「特色入試（例えば新しく導入される推薦入試）の活用方法」をテーマに、特別コース及び領域それぞれでの活用方法などについて議論しました。

A 班からは、入試倍率が下がった一方で危惧していた学力低下は認められないこと、後期の入試倍率が下がる傾向があるなかで前・後期の入学定員の見直しが必要であること、入試と入学後の教育のあり方の連動性を高めること、以前の入試（学科でまとめて）の括り入試の方が倍率が高いこと、入試改革以降は倍率が落ちていること、入学者の最低点数が下落傾向にあること、などを確認しました。また、括り入試が求められている点については、入学時点で領域が細かく分かれていると高校生に理解されづらい、括り入試の方が倍率が上昇するのではないか、その一方でかつての不本意配属問題が再燃する可能性について指摘がありました。

B 班からは、学生の学力の二極化が進んでいることから、入試別の入学者にあわせた教育プログラムの必要性について指摘がありました。とくに、英語力や情報リテラシー力の低下、受け身な学習態度、記述の苦手な学生が目立つようになったという報告がありました。その一方で、モチベーションが高い学生が増えた（海技士プログラム）のようなポジティブな意見もありました。

C 班からは、自己推薦型入試では、自己推薦型入試を特別コースで採用するとしたら、試験の際に行う講義は文系と理系の融合型が望ましいという指摘がありました。特別コースの学生は、語学以外の専門知識が不足しており、3 年次から研究スキルを身につけさせる必要があること、コースの学生全員が海外で卒論をこなすのは難しいこと（半分程度がよい）、農学部へ行きたがる学生が増えていること、などの報告がありました。

最後に、越塩学部長から入試制度の変更はたびたびできるものではないので、平成 31 年、平成 32 年を念頭に準備を進めること、今回の議論をその準備へ活かすこと、などのコメントがなされました。FD ワークショップの参加者は 39 名でした。

6. 学生・教職員ワークショップ

平成 29 年 12 月 14 日、「学生の主体的な学びを促すには」をテーマに、学生・教職員ワークショップを開催しました。時任氏（関西学院大学）の講演後、グループ・ディスカッションを行いました。水産学部からも学生が参加し、学生が主体的に学ぶためにすべきことについて話し合いました。グループは全て学生と教員が混在する形で構成され、両者がともに考え、取り組むべきことと、それぞれが行うべきことについての検討がなされました。最後に、グループごとに成果の発表が行われました。鹿児島大学における教育改善に活かすべき事項も具体的に複数、挙げられたことから、今後の展開につなげることが重要です。一方、専門性を高めるという観点から一定の知識内容を教えなければならない教員側と、意欲をもって学ぶための手立てや工夫を求める学生側とで必ずしも認識が一致しない部分も明らかになりました。

7. 大学院授業アンケートの実施

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で大学院修士課程では平成 25 年度から授業アンケートを実施しており、平成 26 年度には近年の留学生の増加なども考慮して、アンケートの質問項目を日英併記に変更しています。アンケートの様式を図 6.1 に示します。平成 27 年度からは、サマーセッションで来鹿した熱帯水産学国際連携プログラムの学生にも記入を依頼し、講義内容や英語での開講について貴重な意見を得ることが出来ました。また、平成 28 年には Moodle により集計・分析を容易かつリアルタイムにして、担当教員自身でアンケートの結果を確認出来るようにしたり、受講人数が少ない科目ではアンケートを無くしたりする等の工夫を行っています。

水産学研究科では英語による授業の割合が高く、英語による必修科目を日本人学生も受講します。「今まで学習してきた内容を改めて英語で学べた。」「専門用語の英単語がある程度わかるようになった。」等の肯定的な評価も多い一方で、「専門用語が多く、用語の解説が欲しかった。」「全てが英語なので、ある程度英語力がないと厳しい。キーポイントは簡単な英語で短く書いてあると理解しやすいと思う。」「テスト内容のアナウンスだけは日本語でしてほしいです。」等のアンケートを行わなければ教員が気づきにくい指摘もありました。また、実用的な英語能力を養成する科目も設定しており、「日常で英語を話す機会があまりないので、その機会を得られたことがまず第一に良かった。また、自分の考えを英語でまとめるというのが身になった。」等の評価を得ています。

水産学部および水産学研究科では改組を行っており、例えば、平成 26 年度以前入学生では 3 分野に分かれていた組織の一部が融合して平成 27 年度入学生以降、新たな分野になりました。平成 30 年度入学生までは、学部卒業時の所属分野より広い範囲で研究科の授業を受講することになります。当該分野の研究方法を学ぶ特別指導の授業では「自分の分野のみならず、他分野の研究について学ぶことができた。他分野の研究は理解できない難しさだったが、勉強しなくてはならない(水産学を学ぶ学生としての)ので、よい機会となった。また、人に伝える技術を得ることができた。自分の

研究をいかに専門用語を使わずに伝えるか、修業になった。」という意見がある一方、平成 27 年度には「基礎知識を一切持っていない分野の話題は授業についていけなかったので、その点のフォローがあればよいかと思います。」という意見もありました。そのような意見を基に平成 28 年度の授業を行った結果、その分野の特別指導では否定的な意見が出なくなりました。

水産学研究科では修士論文研究や指導教員による総合型指導などで研究能力を個別の指導で高めるほか、各種授業でどのように教育効果をあげていくか、さらに検討が必要であると思います。

大学院水産学研究科 授業アンケート (Graduate school of fisheries class questionnaire)

このアンケートは、受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。集計結果のみを授業担当者にお知らせしますので、回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入して下さい。(This survey will be used to improve the class. This survey will never be connected with your grading. Only a summary of the questionnaire will be given to the teacher.)

受講科目名 : 学籍番号 : 氏名 :
(Class name) (Student number) (Name)

所属分野 (該当する□にレ点) : (Please check your field)

【平成 27 年度以降入生】

【平成 26 年度以前入生】

- 水圏科学 (Aquatic Science) 水産生物・海洋学 (Fisheries biology and oceanography)
 水産資源科学 (Fisheries Resource Sciences) 養殖学 (Aquaculture)
 水産食品科学 (Fisheries Food Sciences) 漁業工学 (Fishing technology)
 水産経済学 (Fisheries economics) 水産経済学 (Fisheries economics)
 水産環境保全学 (Aquatic Environment Sciences) 食品資源・利用学 (Biochemistry and
 その他 (Others) technology of marine food and resources)

上記の質問で、「その他」を選択した場合は所属大学・機関名を記入してください。

(Please type the name of University/Institution which you belong, if you check the "Other" in the above question.)

Q1. この科目を履修して良かったと思う点を自由に記述してください。

(Please describe the good points in this class freely.)

Q2. この科目の改善すべき点について自由に記述してください。

(Please describe the improvable points in this class freely.)

図 6.1 大学院修士課程の授業アンケート様式

8. 卒業時アンケート・修了時アンケート

水産学部では教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施しています。アンケートでは、学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に際して情報収集や相談をどのようにして行ったかを合わせて質問するような設問としました。平成 25 年度から大学院生に対しても修了時アンケートを実施しました(学部回答者数 125 名、修士回答者数 27 名)。ここでは、平成 28 年度の卒業時・修了時アンケートについてまとめます。

卒業時アンケート及び修了時アンケートの設問項目を図 8.1 及び図 8.2 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を図るために全員共通で 6 つの質問を行い、項目 B では国際化に関する質問(平成 26 年度から追加)を、項目 C は就職・進学に関する質問、項目 D では分野ごとに質問を変えて、満足度を 4 段階で評価してもらいました。アンケートは、項目 A、B、C は全体で、項目 D は 分野ごとに集計しました。結果を図 8.3 及び図 8.4 に示します。

項目 A(教育目標)に関する質問では、「③少し思う」を加えると、全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほとんどでした。質問 A-2「地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した」及び A-3「基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した」に関しては、平成 27 年度調査と比較して、「①十分にそう思う」、「②ある程度そう思う」と回答した学生の割合はほぼ変わらないものの、「①十分にそう思う」の割合が卒業生は若干増加しました。また修了生は、A-2、A-3 とも「①十分にそう思う」が平成 27 年度と比べて大幅に増加しており、自身の専門分野の基礎的な知識の習得に肯定的な考えを持てたようです。

質問 A-4 の「水産技術者として必要な英語能力が向上した」項目に対しては、昨年度と同様に「③少しそう思う」「④全く思わない」を選択する卒業生が多いが、修了生では「②ある程度そう思う」を加えた肯定的な回答数が平成 27 年度よりも増加しました。また、「③少しそう思う」までを選択した卒業生は平成 27 年度より減少し、「①十分にそう思う」と回答した修了生の割合は増加しており、これが大学院教育の効果なのか次年度以降も傾向を分析する必要があると考えられます。

国際化に関する項目 B の結果に関しては、卒業生は昨年度と同様に英語力の向上や異文化理解、国際交流に興味はあるものの(質問 B-13~B-17)、実際には取り組んでいない傾向(B-8~B-11)が見受けられました。一方、修了生はすべての項目で「①十分にそう思う」が大幅に増加しており、留学生の増加や海外研修への参加、海外の学生とともに学ぶサマーセッション、などで国際交流に参加する機会が増加したという可能性があります。

質問 C-18 の就職・進学に関しては、卒業生、修了生ともに傾向が似ており、「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」が 70%を超えており、希望する職種につくことができた学生が大半であると考えられます。また、今年度は修了生で「①十分にそう思う」と回答した割合が半数を超え、就職セミナーなど就職支援に関する取り組みの効果が現れつつあると思われれます。

修了生については、全体を通して昨年度と比べて肯定的な回答が増加しており、これが平成 28 年度修了生の特徴なのか、教育効果のあらわれなのかは次年度以降も注視していく必要があります。

以上から、学部・大学院の教育目標はおおむね達成できていると考えられます。

平成 28 年度 卒業時アンケート (学部生用) 学部生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問 1) 学部生は①にマークし, 下記 A に進む. 大学院生は②にマークし, 裏面 A に進む

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問 2～7 にすべて回答) ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した
3. 基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した
5. 情報処理能力が身に付いた
6. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた
7. 現場対応能力が備わった

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問 8～17 にすべて回答)

- 8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?
- 9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
- 10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
- 11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
- 12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
- 13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?
- 14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
- 15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
- 16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
- 17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問 18 に数値をマークしてください)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、下に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問 19～25 のうち 1 つ選択)

- ①十分にそう思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1 つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
25. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた

ご協力、ありがとうございました。

図 8.1 卒業時アンケートの様式

平成28年度 修了時アンケート (大学院生用) 院生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし, 裏面 A に進む. 大学院生は②にマークし, 下記 A に進む

A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した
3. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した
4. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた
5. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた
6. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた
7. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

- 8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?
- 9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
- 10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
- 11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
- 12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
- 13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?
- 14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
- 15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
- 16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
- 17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください (設問19～24のうち1つ選択)

①十分にそう思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた

ご協力、ありがとうございました。

図 8.2 修了時アンケートの様式

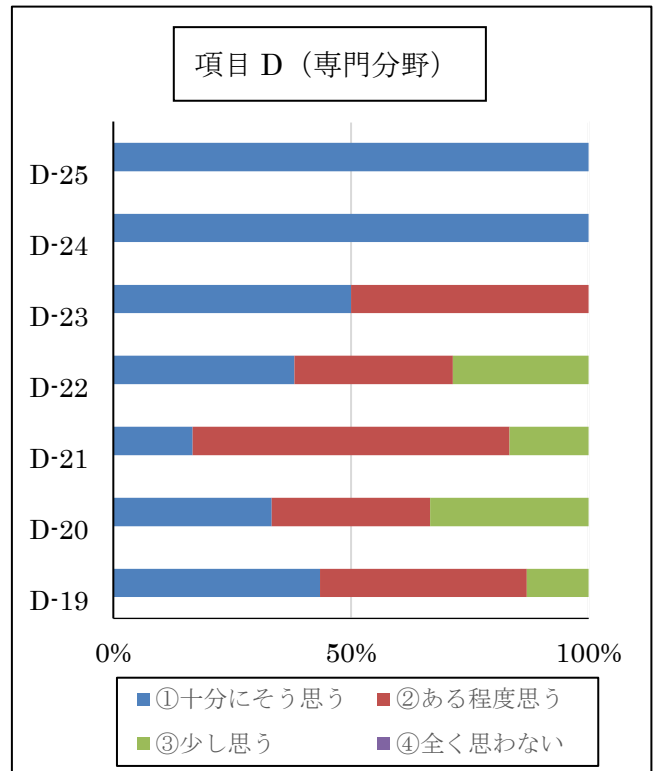
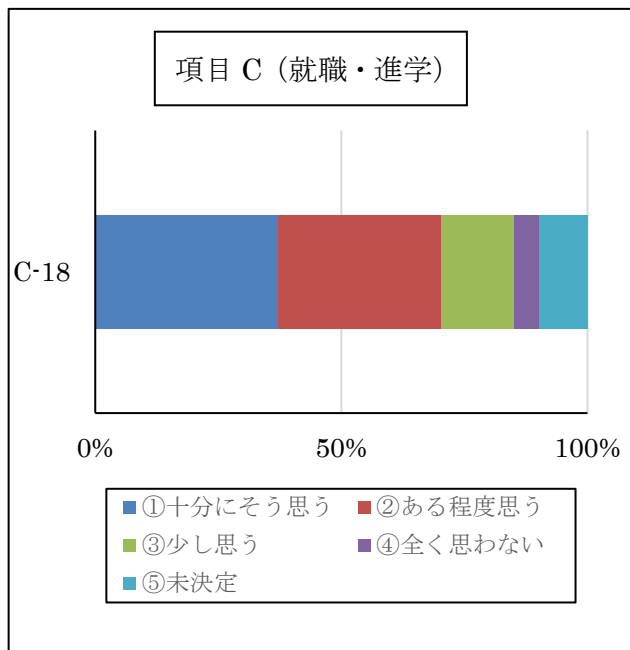
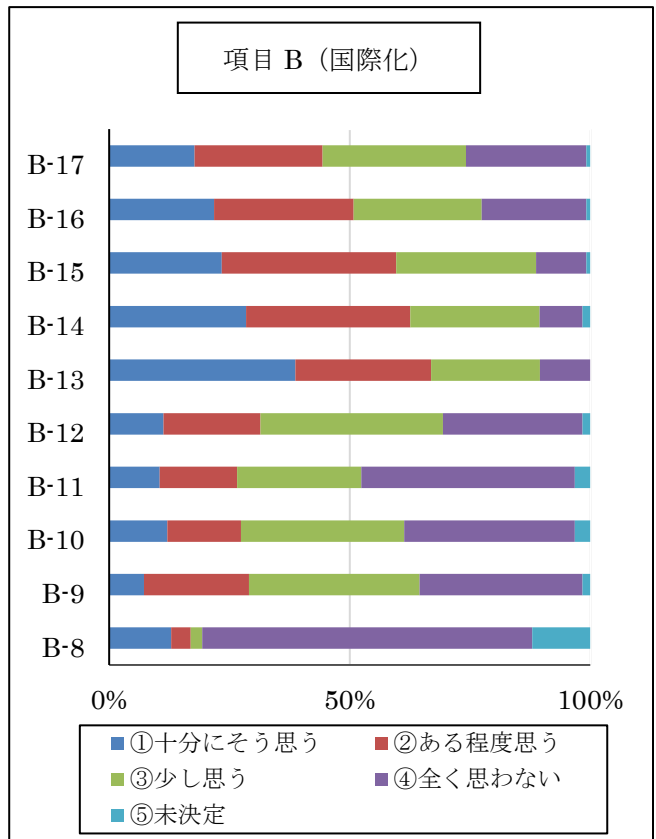
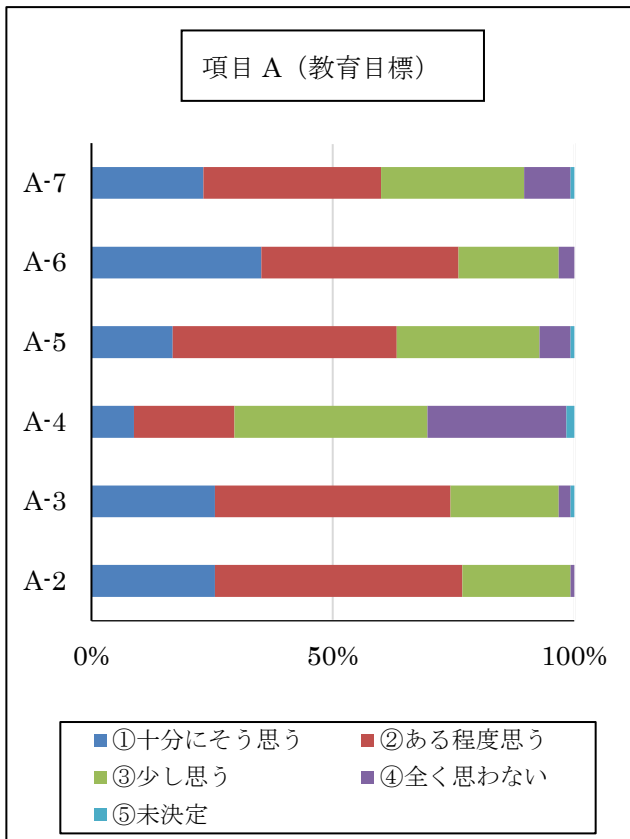


図 8.3 平成 28 年度卒業生に関する集計結果

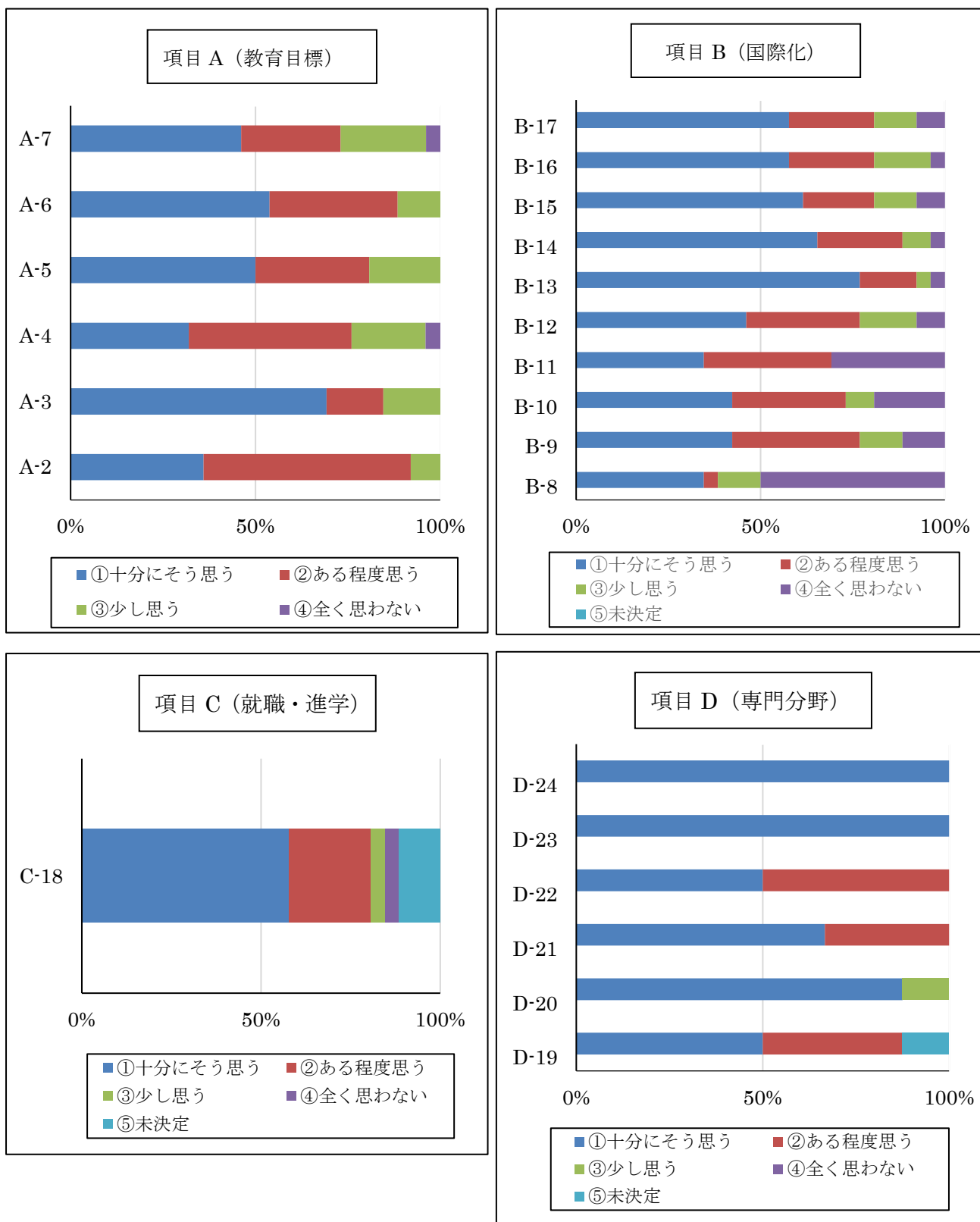


図 8. 4 平成 28 年度修了生に関する集計結果



編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：鳥居享司

副委員長：山本智子

委員：塩崎一弘、仁科文子、竹内裕、福田隆二、郡山 茂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20 099-286-4111 (代表)